

主の昇天

第一朗読 使徒言行録 1・1-11

第二朗読 エフェソ 1・17-23

福音朗読 マタイ 28・16-20

2026.5.17

カトリック高円寺教会 9:30

主任司祭 高木健次神父

神様は、人間ではないので、と言うかいうか、わたしたち造られたものをはるかに超える方です。ですから、その神様との繋がり方というのは、特別な方法によらなければならない面があります。

今日わたしたちがお祝いしている主の昇天、イエス様が天に昇られたっていうのは、まさに他の人と出会ったり話したりするように簡単にはイエス様と繋がることのできないっていう、ある意味では超えた方っていう、その神様の側面を表していると同時に、しかし、来週お祝いします聖霊降臨や、また今日の福音の中での最後の「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(マタイ 28・20)というイエス様の約束は、わたしたち人間の思いをはるかに超えた方であるけれど、その神様とあるいはイエス様とわたしたちはいつも繋がって共にいることができるっていう、大きくかけ離れた方であると共に近くにいらっしゃる方っていう、その二つの側面を表していると言うことができます。

わたしたちを超えた方、すなわち、神様のすべてをわたしたちが把握することができない——そういう「神秘である方」って宗教的に言いますが——ですので、その神様との繋がり方ということは特別に教えていただく必要があるわけです。そうでないと、たとえば自分の思いを神様に投影して、神様と話してるつもりで実は自分と自分が話してるだけっていうこともあり得うるし、それならまだ害はないかもしれませんが、もっとひどい場合は、本当は身近にいる、あるいはかつて出会った誰かに文句を言いたい、だけど文句を言うことができない——相手に依存してるとか、あるいは相手の力が強いからとか——、本当は文句を言いたいけど文句を言うことができない他の誰かっていうその姿を神様の中に見てしまう、そういう可能性はいつもあると思います。で、「神様がどうしてこうなのだ」っていう。本当は他の誰かに言いたい文句を知らず知らずのうちに神様に対する文句かのように心の中で転換してしまう。そ

れも自分の中の不満。でも気がつかないうちに、心の中で神様と話しているつもりだけど、実は直接苦情言うことができない他の誰かと話しているというようなこと。

わたしたちは、そうではなくて、本当に自分の思いをはるかに超えた方ですけども、でも共にいてくださる方との対話へと招かれている。それが、第2朗読でパウロがどんな希望に招かれているか、あるいは神様がどんな大きな力を持っていらっしゃるかを悟らせてくださるようになって祈っていますけど、それは神様のことを完全に理解できるようにというよりは、本当に自分たちが神様のことを完全には知ることができない、しかし、そういう意味で神秘である方だけど、その神秘は断絶とか絶望へ導くものではなくて、今の自分の狭い考え方ではとても全部が受け取りきれない大きな恵みへの希望の源となるということなんです。

だけどそういう神様との対話へと招かれている。それは特定の特別な恵みを与えられた聖人たちだけではなくて、すべての人が、っていうのが、ある意味では今日のイエス様が天に昇られたっていうことのもう一つの意味は、天というのは地上のどんなところからでも見上げることができるっていう意味です。すべての人が神様との繋がりへと招かれている。

だけど、最初にも言いましたように、神様のわたしたちとの関わり方は本当に特別なので、地上のどんなものとも比較することができないので、その神様のやり方っていうことを教えていただき、そしてわたしたちがそれに慣れていく必要がある。その第1歩というのは本当に自分を大きく超える方の前に今招かれて立っているのだ——あるいは座っているのだ——これは自分を大きく変える方、神秘である方に包まれているのだ、その神秘である方が自分を呼んでいるんだっていう、そういうイメージで神様の前に佇むって言いましょうか、時間を取る。自分を大きく超える方の前に自分が今いるのだっていうそのイメージを持ちながら、一定の時間を神様の方に心を向けて過ごすということが、わたしたちがまずできる第一のことだし、それなくしては信仰生活は結局自分の思いの中に取り込まれてしまう。

イエス様はわたしたち人間を大きく超える方とわたしたちを繋げてくださる方だし、わたしたちはそのイエス様に繋がることを通してこの世においてわたしたちが、すべての人が、あるいはすべての造られたものが、目に見える現象だけではなくてそれを造られた方と繋がっているのだということを示す、そういうしるしになるように呼ばれているわけです。

そのためにわたしたちは——繰り返しになりますけども——本当にまずその神秘である方、自分のはかり知れない方の前に呼ばれて、今いる、その方はわたしたちと出会い共にいることを望んでいるのだっていう、そのイエス様の語られたことを絶えず思い起こしながら、その中で、いろんな思い、この世の中の生活上のいろんな出来事とかっていうことを一回置いて、まさにその神秘である方の前に身を置き、時間を過ごすことを通して、だんだんに、もしかしたら恵みによって——いろんな祈り方とかのテクニックを身につけるという意味ではなく——わたしたちにもすでに触れていらっしゃるその神様を意識し、認識し、そして記憶に留めることを通して、神様との出会いが自分にとっての経験になっていくっていう道、それなくしてはできない、そういう道です。その神秘の前に身を置くっていう思い。

わたしたちが絶えず、本当にそのことを通して自分を大きく超える方にいつも繋がりが続き、そして、それだけではなくて、神様はご自分と出会うことの喜びへと招えていらっしゃる、その喜びを味わうことができるんだってというのが教会のメッセージです。その神様と出会うことを通して、心の平安とかその二次的なそういう結果だけではなくて、神様ご自身と出会いそして大きな喜びに至るんだ、そのことを諦めてはならないと思います。呼んでいらっしゃるその神様ご自身の恵みに信頼してね、もっと深くよりはっきりと出会っていくことができるように、わたしたちがイエス様に助けられながら、父である神様ご自身を愛する思いを新たにしたいと思います。

そして、しつこいですけども、そのために自分を超える神秘である方の前に身を置く。そしてその方に呼ばれてここにいるのだっていう思いで、それぞれが一人ひとりとして、また共同体として、このごミサをお捧げし、そして一人ひとりの中に自分を大きく変える方が来ようとしているね、その思いで御聖体を迎えできたら良いと思います。

それは簡単ではない。すぐに五感で感じるできない神様。でもその神様との繋がりが必ず、それは恵みのうちに実現していくという希望のうちに、わたしたちの信仰生活を御手に委ねる^{みて}思いで、このごミサを共に捧げたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>